

読売新聞 きょう（7月20日）のイチ押し

社会面 米子松蔭、一転出場へ 高校野球鳥取大会

高校野球鳥取大会で、新型コロナの感染者が校内で確認され、初戦を不戦敗となった米子松蔭高について、鳥取県高野連は不戦敗を取り消しました。部員の感染はなく、主将の SNS 発信がきっかけとなって、再検討を求める声が相次ぎ、同高から出場を求める嘆願書が出されていました。一度は辞退して不戦敗となった学校の出場が認められるのは異例です。

- ★16日深夜、学校関係者1人の感染が確認されました。初戦は17日で、出場選手を申告する朝までに濃厚接触者がいないことを保健所が確認できず、申告を遅らせるよう求めましたが受け入れられず、やむなく辞退することになりました。突然の決定に、泣き崩れる選手もいたそうです。
- ★西村主将が「必死で練習してきました。何とか出場する道を模索していただけませんか？」とツイッターで投稿。同情や出場を求める声が SNS で相次いで寄せられ、文科省も県高野連に再検討を求めています。

一面 留学生受け入れで入国審査厳格化 中国を念頭に

政府が国内の大学に留学する外国人留学生の入国審査を今春から厳格化していること分かりました。日本の大学で軍事転用が可能な先端技術を研究する場合、学歴や職歴のほか、資金提供を受けている団体や企業についても詳しく報告するように求めています。

中国を念頭に、最先端技術の流出を防ぐ狙いがあります。審査の厳格化で、中国軍の兵器開発とつながりが深い大学の出身者や、外国機関から多額の留学費用を得ているケースを洗い出します。経済安全保障の観点から疑わしい人物と判断すれば、ビザの発給を認めないことも検討します。

他紙と比べて

読売新聞スポーツアドバイザーの堀内恒夫、鹿取義隆、川相昌弘の3氏が月替わりで野球を語る「直球・曲球 解析眼」。20日紙面では、川相氏がペナントレース前半戦を振り返るとともに、後半戦を展望しています。セ・リーグでは首位を争う阪神と巨人の戦いのポイントを、パ・リーグではオリックスが勢いを維持している理由や、混戦の行方を解説しています。巨人の監督やコーチを務めて、球界のご意見番でもある3氏の分析は鋭く、かつ深みがあって、いつも読み応え十分です。